

# 韓国開化期の日本語学習書における 母音音注表記に関する考察

黄 雲\*

(e-mail : hwangwoon@hanmail.net)

## < 목 차 >

- |         |               |
|---------|---------------|
| 1. はじめに | 4. エ段音節母音部の表記 |
| 2. 先行研究 | 5. ウ段音節母音部の表記 |
| 3. 研究方法 | 6. おわりに       |

キーワード：韓国開化期(Korea's Enlightenment Period), 日本語学習書(Japanese Language Primers), 母音音注(Vowel Component), 表記(transcriptions), 規範的表記(normative transcriptions), 実際的表記(practical transcriptions)

## 1. はじめに

本稿では開化期の日本人著の日本語学習書における母音音注のハングル表記について分析し、当時の日本語学習書における表記の様相について考察する。

日本語学習書のハングル音注についての研究は、仮名資料ではほとんど現れない日本語の音声の特徴が現れている点から、日本語音韻史研究で多く活用されているが、主に朝鮮時代の司訳院<sup>1)</sup>を中心に刊行された「倭学書」を対象としており、19世紀以降近代における日本語学習書のハングル音注に関する研究は、非常に少ない状況である。

韓国開化期の前期には『日語工夫』(1891)、『日本語独案内』(1895)、『日語捷徑』(1895)、『単語連語日話朝雋』(1895)、『簡易捷徑日語独学』(1897)、『独修自在日語捷徑』(1905)の6種の日本語学習書が発行されているが、日本人と韓国人

\* 大田大学校 講師、日本語教育学

1) 司訳院は、高麗末期に外国語教育と通訳のために設置された官庁であり、高麗忠烈王2年(1276)に漢語の学習のために設置された「通文館」がその前身である。【鄭光(2007:318,324)】

の共著である『単語連語日話朝雋』(1895)を除くとすべて日本人により作られた<sup>2)</sup>。開化期の日本語教育史において日本人の役割は小さくなかったことが窺える。開化期の後期に入ると韓国人著者による日本語学習書の発行数は増加し、日本人により書かれた学習書は『日語会話』(1908)のみである。

本稿では日本語教育史の観点から、韓国開化期に日本人により著された7種の日本語学習書における母音音注のハングル表記を検討し、当時の音注表記の一端について考察する。

## 2. 先行研究

韓国における日本語教育の嚆矢は、1414年、朝鮮王朝の司訳院で始まったとされている。鄭光(2007:328)では司訳院で使われた日本語教材について時代別に分類し、「前期は(壬辰倭乱以前まで)日本の古往来類の訓蒙教科書を輸入してそのまま使った。中期(壬辰以後英祖・正祖朝まで)は壬辰倭乱の被拉刷還人である康遇聖が編纂した『捷解新語』を中心に、実用的な会話教育が成され、後期(その後)はこれを改修して使用し、『倭語類解』を別途に編纂して語彙教育を強化した」と述べている。

朝鮮時代の司訳院で使われた日本語教材は「倭学書」と呼ばれている。朝鮮前期の倭学書に関しては、『世宗実録』(巻47)世宗12年3月戊午条の記事に、「消息、書格、伊路波、本草、童子教、老乞大、議論、通信、庭訓往来、鳩養勿語、雑語」の11種が、『経国大典』(巻三)礼典では、「伊路波、消息、書格、老乞大、童子教、雑語、本草、議論、通信、鳩養物語、庭訓往来、応永記、雑筆、富士」の14種類の倭学書があったという記録があり、これらのうち現存しているのは『伊路波』だけである<sup>3)</sup>。

朝鮮中期には司訳院の訳官であった康遇聖により『捷解新語』が刊行され、朝鮮後期には中期の『捷解新語』が改修・重刊されるほか、語彙集なども刊行されるが、現在朝鮮時代の倭学書、すなわち日本語学習書としては残されているのは次の6種である<sup>4)</sup>。

2) 黄雲(2017)「韓国開化期の日本語教育に関する考察:日本語学習書による日本語教育の成立を中心に」『日本語文学』第72輯, 韓国日本語学会, p.178.

3) 鄭光(2007)「韓国における日本語教育の歴史」『日本文化研究』第21輯, 東アジア日本学会, pp.324-325.

4) 陳南沢(2003)『朝鮮資料による日本語と韓国語の音韻史研究』東京大学博士学位論文, p.3.

- (1) 『弘治年伊路波』(1492刊行)
- (2) 『捷解新語』(原刊本1676、改修本1748、重刊改修本1781刊行)
- (3) 『倭語類解』(1783-1789刊行推定)
- (4) 『方言集釈』(1778写本)
- (5) 『三学訳語』(1789写本)
- (6) 『隣語大方』(1790刊行)

このうち、日本語に関する音注が現れるのは(1)から(4)の資料である。日本語学習書のハングル音注に関する多くの研究は、15世紀から18世紀まで発行された上記の(1)から(4)を対象としている。

19世紀以降近代における日本語学習書のハングル音注に関する研究は、편무진(1999)、성희경(2010)、김명주(2015)があげられる。

편무진(1999)は、日本語の仮名をハングルで表記した最初の文献である『伊路波』から1941年に朝鮮語学会で〈外来語表記法統一案〉が公表されるまでの日本語学習書を対象に伝統的表記の傾向を大系化して、慣用的表記としての規範を示したうえ、日本語の仮名をハングルに表記する時の合理的な表記法の代案を導出した。しかし、同論文では、個別的文献の表記法に関する分析と検討は後稿に譲っている。

성희경(2010)は、朝鮮時代に刊行された『倭語類解』を改訂した『日語類解』(1903)を対象に日本語の表記及び音声的・音韻的な特徴について考察した。同論では『日語類解』の日本語の母音音節であるア列音・イ列音・オ列音(a i o)は『倭語類解』の表記とほぼ一致しているが、『倭語類解』の日本語ウ列音の表記は母音[u]で表記されているに対し、『日語類解』では円唇母音である[u]の表記になっていると述べている。また、エ列音の表記は『倭語類解』ではほぼ [-yɔi]で表記されているに対し、『日語類解』ではほぼ [-ɔi]で表記されていると記している。

김명주(2015)は、朝鮮時代の日本語学習書のハングル音注に対する研究は多くの研究者によって進められているが、20世紀前期のハングル音注表記に関する研究は少ない点を指摘し、20世紀前期の日本語学習書に現れるハングル音注を類型別に分けて考察をしている。김명주(2015)は1895年から1941年まで発行された日本語学習書15種を対象としているが、境益太郎と李鳳雲が著した『単語連語日話朝窩』(1895)を除けば、すべて韓国人によって書かれた学習書であり、日本人著書の学習書は考察されていなかった。

一方で、이강민(2011)では、本稿の対象である『日語独学:簡易捷徑』(1897)につ

いて考察しているが、その内容と言語資料としての性格に注目している。同論では、本書の日本語に対するハングル表記には韓国語の音韻史的な側面から接近できる用例が見られ、今後より細密な検討が必要であるように思われる」(p.97)と述べている。

また、黄雲(2018)では、開化期の日本語学習書である『日語捷徑』(1895)をとりあげて考察しており、同書の音注表記において18世紀から韓国語に実現された単母音化が反映されていることを記している。

本稿では、上記の先行研究を参考にしつつ、開化期に刊行された日本人著書の日本語学習書の音韻的な特徴を分析していく。

### 3. 研究方法

本稿では以下の7種の開化期の日本語学習書<sup>5)</sup>における母音音注のハングル表記について分析し、当時の日本語学習書における表記の様相について考察する。

(1) 『日語工夫』(1891)

著者：中野許多郎 発行日：1891年5月21日

(2) 『日語捷徑』(1895)

著者：金沢末吉 発行日：1895年5月31日

(3) 『日本語独案内』(1895)

著者：稲益謙吉 発行日：1895年6月16日

(4) 『単語連語日話朝雋』(1895)

著者：境益太郎・李鳳雲 発行日：1895年6月

(5) 『簡易捷徑日語独学』(1897)

著者：弓場重栄 発行日：1897年12月26日

(6) 『独修自在日語捷徑』(1905)

著者：金島苔水・広野韓山 発行日：1905年9月21日

(7) 『日語会話』(1908)

著者：島井浩 発行日：1908年6月1日

5) 開化期の日本語学習書の書誌学的な情報に関しては、黄雲(2016)を参照されたい。

以下、表の作成において、『日語工夫』(1891)は『工夫』、『日語捷徑』(1895)は『捷徑』、『日本語独案内』(1895)は『案内』、『単語連語日話朝雋』(1895)は『朝雋』、『簡易捷徑日語独学』(1897)は『独学』、『独修自在日語捷徑』(1905)は『独修』、『日語会話』(1908)は『会話』とする。

本稿では、김명주(2015)で考察した15種の学習書<sup>6)</sup>のうち、開化期に発行された以下の5種の日本語学習書の考察結果を参考にする。

(1) 単語連語 日話朝雋 全 (1895)

著者：境益太郎・李鳳雲 発行日：1895年6月

(2) 独習 日語正則 (1907)<sup>7)</sup>

著者：鄭雲復 発行日：1907年9月20日

(3) 改正 精選日語大海 (1909)

著者：朴重華 発行日：1909年2月15日

(4) 初等自解 日語文典 (1909)

著者：宋憲奭 発行日：1909年6月5日

(5) 日語正編 (1910)

著者：南宮濬 発行日：1910年4月24日

ハンゲルのローマ字表記においては、以下の福井玲式ローマ字転写法<sup>8)</sup>に従うことにする。

6) 本稿で扱う5種を除く10種の学習書は、『精選 日語通編』(1910)、『日本語学 音・語編』(1911)、『増訂改版 中等日语法 全』(1912)、『無双 日語自通』(1914)、『速修 国語讀本』(1914)、『日語大学』(1917)、『速修 自解 国語讀本』(1927)、『無先生増補速修国語讀本』(1931)、『三個月 速修 国語自通』(1935)、『精選 国語大範』(1941)である。

7) 김명주(2015)では1908年発行とされているが、筆者の調査によると1907年9月20日に発行されている。

8) 転字(transliteration)とは、ある文字体系を別の文字体系で表記するものである。従って、この方式の転字も、朝鮮語の「音」をローマ字化したものではなく、ハンゲルの字母を1対1でローマ字に置き換えるシステムである。【東京外国語大学 朝鮮語の部屋：http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/choes/korean/middle/fukui.html (検査日：2019.4.5)】

〈表1〉 ハングルのローマ字転写対応表

## (1) 子音

ハングル	ㄱ	ㄷ	ㅂ	ㅅ	ㅈ	ㅊ	ㅌ	ㅍ	ㅇ	ㄴ	ㄹ	ㄷ
文字転写	g	d	b	v	s	z	j	h	n	m	r	
ハングル	ㅋ	ㅌ	ㅍ	ㅑ	ㅕ		ㅓ	ㅗ		ㅛ		
文字転写	k	t	p	f			c	x		w		
ハングル	ㄲ	ㄸ	ㅃ		ㅆ		ㅈ	ㅊ				
文字転写	gg	dd	bb		ss		jj	hh				
ハングル			ㅇ				ㅇ / ㅁ					
文字転写			'				q					

## (2) 母音

ハングル	ㅣ	ㅏ	ㅑ	ㅓ	ㅕ	ㅗ	ㅛ	ㅜ	ㅠ	·	ㅡ
文字転写	i	a	ia	e	ie	o	io	u	iu	@	y
ハングル		ㅓ	ㅑ	ㅓ	ㅕ	ㅗ	ㅛ	ㅜ	ㅠ	·	ㅡ
文字転写		ai	iai	ei	iei	oi	ioi	ui	iu	@i	yi
ハングル						ㅑ		ㅓ			
文字転写						oa		ue			

18世紀までの日本語学習書には、日本仮名の凡例的な対照表を記していない反面、19世紀からは学習書によって対照表の提示有無が異っているが、本稿で扱う開化期に日本人によって発行された日本語学習書はすべて仮名対照表が提示されている。本稿では、便宜上、「文字部」の対照表の表記を「規範的表記」、「単語・会話部」の表記を「実際の表記」ということにする<sup>9)</sup>。

9) 편우진(1999:226)では、対照表の表記を「規範的表記」、対照表が提示がない学習書の実際使用されている表記を「実際の表記」と分けている。

## 4. エ段音節母音部の表記

開化期の日本語学習書の「文字部」で提示されている日本仮名の対照表の表記を以下の〈表2〉に記す。

〈表2〉 開化期日本語学習書「規範的表記」のエ段音節対照表<sup>10)</sup>

	1891 『工夫』	1895 『捷徑』	1895 『案内』	1895 『朝雋』	1897 『独学』	1905 『独修』	1908 『会話』
エ	예 'iei	에 'ei	예 'iei	에 'ei	예 'iei	에 'ei	예 'iei
ケ	계 giei	계 gei	계 giei	계 giei	계 giei	계 giei	계 giei
ゲ	--	--	ㄱ계 g-giei	ㅇ계 q-giei	케 kiei	ㅇ계 q-giei	쎄 sgiei
セ	세 siei	세 sei	세 siei	세 siei	세 siei	세 siei	세 siei
ゼ	--	--	ㅅ세 s-siei	ㄴ세 n-jiei	체 ciei	ㄴ세 n-jiei	제 jei
テ	테 dei	테 dei	테 dei	테 dei	테 dei	테 diei	테 dei
デ	--	--	ㅅ테 s-dei	ㄴ테 n-dei	테 tei	ㄴ테 n-dei	뎨 sdei
ネ	네 niei	네 nei	네 nei	네 niei	네 nei	네 niei	네 nei
ヘ	헤 hiei	헤 hei	헤 hiei	헤 hei	헤 hiei	헤 hai	헤 hiei
ベ	--	--	ㅂ베 b-bei	ㅁ베 m-biei	페 pei	ㅁ베 m-biei	뎨 sbei
ペ	--	베 bei	페 pei	piei	베 biei	페 piei	베 be

10) 黄雲(2018:163)から転載

メ	메 miei	메 mei	메 miei	메 mei	메 miei	메 mei	메 miei
ヤ行	예 'iei	예 'ei	예 'iei	예 'iei	예 'iei	예 'iei	예 'iei
レ	레 riei	레 rei	레 rei	레 riei	레 rei	레 riei	레 rei
ワ行	웨 'iei	에 ei	웨 uei	에 'iei	웨 uei	웨 uiei	웨 uei

陳南沢(2003:42)で、(18世紀までの)「朝鮮資料(日本語学習書)では、『倭語類解』において「て」の音注に「테 dei・떼 ddei」が、「ね」の音注に「네 nei・네 ne」が現れることを除くと、弘治5年『伊路波』をはじめ、全資料で「エ列音」を「ㄷ·ㅟ ie·iei」で音注している」と書いているように、朝鮮資料のエ段音節母語部の音注表記は、「ㅟ iei」、「ㄷ ie」、「ㅟ ei」、「ㄷ e」の4種類であった。このように朝鮮資料のエ段音節母語部への音注が混用された原因として、趙罔熙(1999)と조강희(2008)は、十五世紀から十八世紀まで韓国の音韻体系には、日本語の「エ」に当る単母音がなく、エに近い現代語「예」は、18世紀までは、二重母音であったことを挙げている。

김명주(2015:6)では、「20世紀前期の資料には예、세、<sup>ㄹ</sup>제を除いてはすべてㅟで表記され、前の時期と大きな違いがある。20世紀前期は韓国語の単母音化が既の実現された時期である。よって、20世紀前期の資料から単母音化されたㅟを表記に積極的に反映したと見られる」と述べており、日本語学習書の「エ列音」の音注表記において、18世紀から韓国語に実現された単母音化が大きい影響を与えたと見られる。

上記の先行研究の対象資料は、その表記において、「通時的」な変化は見られるものの、「共時的」には、規則性を保っていると言える。しかし、18世紀末から19世紀初期に集中して発行された開化期の日本人著書の日本語学習書には、「エ列音」の表記において多くの揺れがみられ、「テ」以外において単母音化の実現は実感できない状況である。

『日語工夫』(1891)の「エ列音」の実際的表記は、「ネ」の表記以外は、規範的表記に充実して表記されており、「テ」(테 dei)を除くと、すべて「ㅟ iei」が用いられている。『日語工夫』(1891)の「ネ」における「実際的表記」には、「네 niei」の他に「네 nie」の表記が現れる。

(1) 「네 niei」の例

- a. 가사네데미느니요리 (重ねて見ねにより)  
ga-sa-niei-dei-mi-ny-ni-'io-ri (p.10)
- b. 구레니네루 (暮れに寝る) gu-riei-ni-niei-ru (p.14)

(2) 「년 nie」の例

- a. 一年 이디년 'i-di-nien (p.5)
- b. 来年 라이년 ra-'i-nien (p.5)
- c. 明年 묘년 mio-nien (p.5)
- d. 昨年 삭년 sag-nien (p.6)

趙罔熙(1999:73)は「ネ」の表記について、韓国語音韻からの観点から「韓国語の場合、前説二重母音の前に比較的閉鎖性が弱い鼻音がくると[n]が脱落してしまい、[ʼje]になるか、或いは[nie]になる可能性が高い。(中略) 即ち、「ね」nyæiのnが脱落して'ya:iになるのを防ぐために、yæを用いてnyæで表わしたのである」と考察している。また、장희(2002:234)では、朝鮮資料の母音音注の表記の考察から[yæ]が現れる環境として、n\_\_、\_\_Nをあげており、『日語工夫』(1891)の音注表記において中世朝鮮資料と同じ傾向が見られることが窺える。

『日語捷徑』(1895)の「規範的表記」には、「エ列音」がすべて「-ㅛ ei」で、「实际的表記」においても、会話文において、仮名のハングル表記がないため、その例は少ないのであるが、「고비 go-byi (p.64)」の例を除けば、すべて「ㅛ ai」、「ㅛ @i」、「ㅛ ei」で音注されており、韓国語の単母音化が確認できる<sup>11)</sup>。

『日本語独案内』(1895)と『単語連語日話朝雋』(1895)は、特にハングル表記の揺れが激しく見られ、同じ単語・条件でもハングル表記が異なっているところが以下のように現れる。

(3) 『日本語独案内』(1895)

- a. 해야 (部屋) hiei-'ia (p.33)、(p.54)  
해야 (部屋) hei-'ia (p.49)、(p.53)、(p.54)
- b. 쓱싸리시메요 (しっかり閉めよ) sis-sga-ri-si-miei-'io (p.63)

11) 黄雲(2018)「韓国開化期の日本語学習書『日語捷徑』(1895)について」『日本文化学報』第78輯, 韓国日本文化学会, p.162.

맛터시메요 (もつと絞めよ) mas-te-si-mei-'io (p.54)

(4) 『単語連語日語朝雋』(1895)

a. 호네 (骨) ho-niei (6張表)

무네 (胸) mu-nei (6張裏)

b. 헤이디노 가즈와 스베데 이구라호도니 데스가 su-biei-dei (13張表)

(兵隊の数はすべていくらほどですか)

스베데 (すべて) su-bei-diei (27張表)

『簡易捷徑日語独学』(1897)と『日語会話』(1908)の「實際的表記」は「規範的表記」とほぼ一致しており、「テ」・「ネ」・「レ」において単母音化が確認できる。

開化期の日本人著の日本語学習書では、「テ」の規範的表記において、『独修自在日語捷徑』(1905)を除いて、すべて「테 dei」を用いている。また、『独修自在日語捷徑』(1905)においても、その實際的表記では、「테 dei」が457回現れる反面、「테 diei」の例は15回しか見られない。

土井・浜田・安田(1959:6)では、『倭語類解』(1783-1789刊行推定)の「テ」の表記について、「一般的に、tと、iおよびyとの結合は、正書法として存在したが、以降破擦音化し、近代朝鮮語では、cとの結合に変化したと言われる。(中略)もし、テをtyəiのように、他のエ列音と等しく、母音部を~yəiで表わすとしたら、今述べた理由で、正確に破裂音[te]を表わし得ず、[tʃe]と発音される可能性も十分に考えられるのである。従って、その[tʃe]との混同を避けるために、他と違った母音表記を必要としたのではなからうか」と考察をしているが、開化期の日本語学習書の著者も、近代朝鮮語で起きた破擦音化を認識していたと考えられる。

## 5. ウ段音節母音部の表記

開化期の日本人著書の日本語学習書の規範的表記を見れば、19世紀の学習書にはウ段音節のハングルはすべて[u]で表記されていることに対して、20世紀に入り、[y]の表記が登場する。開化期の日本人著の日本語学習書の規範的表記を以下の〈表3〉に記す。

〈表3〉 開化期日本語学習書の「規範的表記」のウ段音節対照表

	1891 『工夫』	1895 『捷経』	1895 『案内』	1895 『朝雋』	1897 『独学』	1905 『独修』	1908 『会话』
ウ	우 'u	우 'u	우 'u	우 'u	우 'u	우·(으) 'u·('y)	우 'u
ク	구 gu	구 gu	구 gu	구 gu	구 gu	구·(으) gu·(gy)	구 gu
グ	--	--	ㄱ구 g-gu	ㅇ구 q-gu	쿠 ku	ㅇ구 q-gu	꾸 sgu
ス	수 su	수 su	수 su	수 su	수 su	수·(스) su·(sy)	수 su
ズ	--	--	ㅅ수 s-su	ㄴ주 n-ju	추 cu	ㄴ주 n-ju	쯔 sjy
ツ	주 ju	--	두 du	두 du	두 du	두·(트) du·(dy)	주 ju
ヅ	--	--	ㅅ두 s-du	ㄴ두 n-du	투 tu	ㄴ두 n-du	쯔 sjy
ヌ	누 nu	누 nu	누 nu	누 nu	누 nu	누·(느) nu·(ny)	누 nu
フ	후 hu	후 hu	후 hu	후 hu	후 hu	후·(호) hu·(hy)	후 hu
ブ	--	--	부 b-bu	ㅁ부 m-bu	푸	ㅁ부 m-bu	뿌 sbu
プ	--	--	--	--	부 bu	--	부 bu
ム	무 mu	무 mu	무 mu	m 무 mu	무 mu	무·(므) mu·(my)	무 mu
ル	루 ru	루 ru	루 ru	루 ru	루 ru	루·(르) ru·(ry)	루 ru

陳南津(2012)は、日本語学習書と日本紀行資料の「ツ・ヅ・ス・ズ」の音注の考察から、17世紀半ばごろに「ツ・ス」の音価が[tsu][su]から[tɕu][ɕu]に変わったと推定してお

り、上記のような音注表記は朝鮮資料が文字にとらわれずに当時の実際の音声を記録していることを示すと述べている。

開化期、韓国人著書の日本語学習書の「ス」の表記において『単語連語日話朝雋』(1895)、『独習日語正則』(1907)、『改正精選日語大海』(1909)、『日語正編』(1910)では「수」、『初等自解日語文典』(1909)では「스」と表記されており、「ツ」の表記においては、『単語連語日話朝雋』(1895)、『独習日語正則』(1907)『大海』(1909)では「두」、『初等自解日語文典』(1909)、『日語正編』(1910)では「쓰・즈・쯔」と表記されているように20世紀初までの日本語学習書にはまだ[u]で表記されており、次第に[w]に変わっていく様子が伺える<sup>12)</sup>。

しかし、日本人著の日本語学習書は、前章の「エ列音」と同様に共時的な規則性は見せていない。また、実際の表記と規範的表記とはその様相が異なり、その用例においても多くの揺れは見られる。

以下の〈表4〉は、開化期の日本人著書の日本語学習書の実際の表記である。

〈表4〉開化期日本語学習書の「実際の表記」のウ段音節表記の様相

		1891 『工夫』	1895 『捷経』	1895 『案内』	1895 『朝雋』	1897 『独学』	1905 『独修』	1908 『会话』
ス	수 su	5	--	249	50	230	371	272
	쓰 sjy	21	--	--	259	37	136	20
ツ	두(주) du(ju)	--	--	131	3(주)	147	5(두) + 47(주)	75(두) + 75(주)
	드(즈) dy(jy)	21(즈)	21	3	298(즈)	3	3(드) + 315(즈)	2(드) + 3(즈)

1719年以前にス、ズ、ツ、ヅは円唇から非円唇に変わり、韓国人は今日でもス、ズ、ツ、ヅは[w]としてウ段の他の字は[u]として認識しているが<sup>13)</sup>、開化期の日本語学習書から

12) 김명주(2015) 「20세기 전기 일본어 학습서의 일본어 한글 표기 연구」 『어문학』 128집, 한국어문학회, p.10.

13) 조강희(2008) 「倭学書에 表記되어 있는 한글 音注에 관한 通時的 연구」 『일본어문학』 제37집, 한국일본어문학회, pp.148-149.

見ると韓国人著書・日本人著書両方において円唇表記を用いている。

特に「規範的表記」において、[u]を用いたのは学習書という特性があるため言語学習の効率性を考えたのではないかと思われる。この特徴は、「ツ」の表記において「ヅ」「쓰」ではなく「두」をつけていることとも一脈が通じている。

## 6. おわりに

本稿では開化期の日本人著書の日本語学習書における母音音注のハングル表記について分析し、当時の日本語学習書における表記の様相について考察した。

18世紀末から19世紀初期に集中して発行された開化期の日本人著書の日本語学習書には、「エ列音」の表記において多くの揺れがみられており、韓国語単母音化の過渡期の様相をよく見せている。また、「オ列音」においても、実際の表記は規範的表記とはその様相が異なる。これらはハングル表記において文字をみて音注をつけたのではなく、音声から直接音注をつけたためと考えられる。

開化期の日本人著者は、商業に携わっていた人物がいれば、すでに韓国語学習書を著した経験を持っている人物もいた。経歴や発行背景などが異なっている状況で発行された7種の学習書には、朝鮮時代に司訳院を中心に刊行された日本語学習書に比べ、「通時的」・「共時的」な規則性は非常に弱かった。しかし、開化期の日本人著書の日本語学習書には、「規範的表記」と「実際の表記」がしっかりされており、語学学習書としてと形態が整っていたと判断できる。また、その表記の様相から学習書を刊行した著書が近代朝鮮語で起きた破擦音化を認識していたこと、学習者の言語学習の効率性を考えたことが窺えた。

### 【参考文献】

- 김명주(2015) 「20세기 전기 일본어 학습서의 일본어 한글 표기 연구」 『어문학』 128집, 한국어문학회, p.6, p.10.  
 성희경(2010) 「『日語類解』의 일본어 표기와 음운에 대하여」 『동북아문화연구』 제24집, 동북아시아문화학회, pp.61-76.  
 이강민(2011) 「春園 李光洙의 日本語 學習書 『日語独学』에 대하여」 『일본학보』 제86집,

- 한국일본학회, p.97.
- 조강희(2002) 「朝鮮資料의 母音 音注表記에 대하여」 『일본어문학』15, 한국일본어문학회, p.234.
- \_\_\_\_\_(2008) 「倭學書에 表記되어 있는 한글 音注에 關한 通時的 研究」 『일본어문학』 제37집, 한국일본어문학회, pp.148-149.
- 편무진(1999) 「일본음 한글 표기의 역사적 고찰」 『일본문화학보』 제6집, 한국일본문화학회, p.226.
- 趙焄熙(1999) 『朝鮮時代の日本語學習書による日本語音声・音韻の研究』 広島大学大学院博士学位論文, p.73.
- 鄭光(2007) 「韓国における日本語教育の歴史」 『日本文化研究』 第21輯, 東アジア日本学会, pp.315-333.
- 陳南沢(2003) 『朝鮮資料による日本語と韓国語の音韻史研究』 東京大学博士学位論文, p.3, p.42.
- 土井洋一・浜田敦・安田章(1959) 「倭語類解考」 『国語国文』 第28卷 第9号, 京都大学文学部国語学国文学研究室, pp.1-48.
- 黄雲(2016) 『韓国開化期における日本語教育に関する考察』 麗沢大学大学院博士学位論文
- \_\_\_\_\_(2017) 「韓国開化期の日本語教育に関する考察:日本語學習書による日本語教育の成立を中心に」 『日本語文学』 第72輯, 韓国日本語文学会, p.178.  
(DOI:http://dx.doi.org/10.18704/kjill.2017.03.72.175)
- \_\_\_\_\_(2018) 「韓国開化期の日本語學習書『日語捷徑』(1895)について」 『日本文化學報』 第78輯, 韓国日本文化学会, pp.162-163. (DOI:http://dx.doi.org/10.21481/jbunka..78.201808.153)

東京外国語大学 朝鮮語の部屋

<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/choes/korean/middle/fukui.html> (檢査日:2019.04.05.)

논문 투고 일자: 2019. 04. 14.

논문 심사 일자: 2019. 05. 03.

게재 확정 일자: 2019. 05. 07.

<要旨>

韓国開化期の日本語学習書における母音音注表記に関する考察

黄雲

本稿では開化期の日本人著書の日本語学習書における母音音注のハングル表記について分析し、当時の日本語学習書における表記の様相について考察した。

本稿の考察対象の日本語学習書では「規範的表記」と「実際の表記」は一致していない場合が非常に多く見られているが、これは文字をみて音注をつけたのではなく、音声から直接音注をつけたためと考えられる。

また開化期の日本語学習書の著者は、近代朝鮮語で起きた破擦音化を認識していたことが窺え、言語学について知識を持っていたと推測できる。

A Study on the Transcriptions of the Vowel Component  
in Japanese Language Primers of Korea's enlightenment period

Hwang, Woon

The present study analyzed the Korean language transcriptions of vowel components in Japanese language primers during Korea's enlightenment period and examined the patterns of transcriptions in Japanese language primers.

The results confirmed that it was often the case that "normative transcriptions" did not match "practical transcriptions" in Japanese language primers during Korea's enlightenment period, and it seems that vowel components may have been transcribed not from letters but directly from phonetic sounds.

Additionally, the authors of Japanese language primers during Korea's enlightenment period seem to have recognized affrication in Korean; thus, they likely had a certain level of linguistic knowledge.